

ほんものまおい

人馬一体脈々と

「相馬野馬追」は、千年もの歴史をもつ国指定重要無形民俗文化財の祭だ。相馬野馬追標葉郷(しねはごう)騎馬会の吉田賢人さん(33)も、野馬追に出場している。私たちは7月28日、賢人さんに野馬追に対する思いを聞いた。賢人さんは「野馬追は多くの人の力があってこそできるお祭。達成感があっても楽しい」と語った。

相馬野馬追標葉郷騎馬会

吉田賢人さんに聞く

吉田賢人さん(33)は、震災をきっかけに再小学校3年生から相馬野馬追に出場した。賢人さんが相馬野馬追に出場したきっかけは、父が野馬追に出場している姿を見たことだ。大学生になり一時期野馬追から離れたが、震災をきっかけに再び出場するようになった。今年の甲冑(かっちゅう)競馬で賢人さんは2着となった。賢人さんは、「毎日しっかりと努力をすれば、結果はついてくる。馬術競技をやっているので、速くて強い馬を準備すれば簡単に勝てると思っていたんです。でも勝てなかった。どんなに速い馬を選んでも、努力をしなければ、レースには勝てません」と語った。毎朝4時に起きて馬の世話をし続け、野馬追の1か月前から早朝から祭事場まで行き訓練を重ねた。父親、弟と出場



▲吉田賢人さんと、野馬追の馬装したホルマノ号

題字「ほんものまおい」は本物の野馬追という意味。吉田さんが言った「本物の野馬追を残す」という言葉を生かした。

した今年の相馬野馬追。双子の弟である学人さん(33)が甲冑競馬最初のレースで1着となった。賢人さんは、弟の勝利について、「最初のレースで1着をとることは、郷の騎馬会にとっても名誉あることなんです。郷のみんなが喜んでくれました」と話す。今年の相馬

震災乗り越えて明日に希望を



▲震災直後の様子を語る栄光さん

東日本大震災当時の浪江町と厩舎(きゅうしや)の馬たちの様子について、賢人さんに代わって、同席した父の栄光さんが話してくれた。

「帰還困難区域となった浪江町には、多くの動物たちが取り残された。約1週間後、騎馬会の仲間たちと馬を探しに町へ入った。町内には、食料がなく行き先を失った動物たちがたくさんいた。吉田さんたちは、厩舎を離れた馬をすべて集め、共に避難した。飼育主を失った動物の中に

野馬追は、3年ぶりの通常開催だった。コロナの影響を受けた3年間、吉田さんたちは諦めなかった。そこには千年以上の歴史をもつ相馬野馬追を、形を変えずに本物のまま伝えたいという思いがあった。父親の栄光さん(58)は「相馬野馬追は、準備は大変だが、仲間や家族の協力なしでは開催できない。何事も準備が大事」と語った。人馬一体の祭は、震災後も地域の人々の手でつながってきたのだ。(渡邊)

景色が違って見えた

野馬追の馬に乗馬体験

正しく形を変えずに繋げていくことが使命だ、と話す姿からは、野馬追に

は、命を落とした動物も多かった。それでも、震災の年の7月に野馬追が開催された。「大変な状況だからこそ、一人でも多くの人に勇氣や希望を届けたい」と思い、仲間たちとの話し合いを重ね、参加を決めたんだ。どんなに大変なことがあっても野馬追を続けていきたいという栄光さんたちの強い思いが参加へとつながった。野馬追を



▲野馬追の装いの馬に乗った

伝統つなぐ「相馬野馬追」



▲野馬追で使った道具を乾燥させている

標葉郷とは、現在の浪江町・大熊町・双葉町の3町にあり、騎馬会には50人ほどが所属している。吉田さんは、自営業のかたわら、自宅近くの厩舎で6頭の馬を飼っており、祭の時には、10頭ほどの馬の世話をしている。(岡崎)

最初に馬体の左側から足をかける。以前動物園で、乗った馬に比べて大きく少しくわかった。しかし、乗ってみると乗る前の景色と違って見えた。いつもより地面が遠く見えて、空に飛んでいく感じがした。馬に乗ったとしても揺れ



たが、風が気持ち良かった。馬に乗っている時に賢人さんは、馬のことに「ついて優しく話をしてくれ。馬の足の筋肉は、すごく引きしまっていた。ひづめも大きく格好良かった。馬たちの元気な姿から、吉田さんたちが大変な苦勞をして育てている事がわかった。賢人さんが、とても楽しそうに馬をなでている姿が印象に残った。(加藤)まず左足から乗って、あぶみに足をのせた。馬のくらは敷きものがあり、お尻が痛くなかった。次に手綱(たづな)を持ち出発する。思ったより

も馬が大きく、高いところからの景色を見ることができ、うれしかった。緊張しないように「とんとん」と叩いてあげると、馬は落ち着く。「緊張は人から馬に伝わる」と賢人さんから聞いた。人が緊張していると、馬も「僕には人に信用されていない」と思い込み、緊張してしまう。そのため自分が緊張しないことが大切だ。(菅沼)

私たちが作りました。

渡邊莉菜(磐城緑蔭中2年)、神谷菜月(磐城高1年)、菅沼慎(長瀬小5年)、岡崎暁仁(行健中3年)、加藤晴琉(塩沢小6年)